

2 個別課題

個別—1 持続性のあるユズ産地の育成

概要

担い手を育成するため、経営管理や省力・高品質生産技術を指導し、収益性の高い青果生産に誘導しました。その結果、青果生産者は前年の9名から12名に増えました。

課題を取り上げた理由（背景・目的）

ユズの栽培面積は76ha、販売量は664t（H29実績）で、傾斜地を利用した経営補完品目として定着しています。しかし、その大半は高齢・小規模農家による酢玉生産で、収益性が低いことから後継者が育っていません。そこで、経営管理や省力・高品質生産技術を指導し、青果生産に誘導しました。

対象 園芸部柚子部会(9名)、無農薬柚子部会(376名)

目標（評価指標）

評価項目	現状（H29年度）	目標（H30年度）	実績（H30年度）
青果生産者	9名	12名	12名
青果出荷量	32t	35t	29t



現地指導のようす

活動内容

- 1 推進体制を強化するため、産地協議会の運営を支援しました（産地協議会3回、37名）。
- 2 青果生産に誘導するため、経営改善に関する情報を提供しました（個別指導15回、10名）。
- 3 モデル経営体を育成するため、経営管理と省力・高品質生産技術を指導しました（個別指導18回、2名）。
- 4 優良系統の苗供給体制を整備するため、育苗技術を指導しました（個別指導7回、4名）
- 5 省力・高品質生産技術を普及するため、省力機械等の導入、低樹高仕立て、病虫害防除技術等を指導しました（研修会10回、96名 個別指導8回、3名 防除暦配布30名）。
- 6 出荷期間を延長するため、カラーリング技術を実証しました（1か所）。

活動にあたっての連携する団体

嶺北地域果樹産地協議会（JA高知県土長地区いほく営農経済センター、本山町、大豊町、土佐町）

結果及び成果

- 1 青果生産者が9名から12名に増え、うち2名の経営改善計画が認定されました。
- 2 優良系統の育苗が開始され、平成31年度からの苗供給体制が整いました。
- 3 モノレール（1名、90m）や防除機（1名）が導入され、また、低樹高仕立てや病虫害防除技術が普及し、青果生産面積は3.5haから4.3haに拡大しました。一方、青果出荷量は集中豪雨等の影響もあり、前年対比91%の29tに止まり、目標を達成できませんでした。
- 4 カラーリング技術が実証され、次年度から本格的に取り組むことになりました。

残された課題及び今後の活動

1 持続性のあるユズ産地の育成

(1) 生産体制の強化

優良園地の確保や作業受委託システム整備、出荷期間の延長等を支援します。

(2) 省力・高品質生産技術の普及

省力機械等の整備や優良系統の新・改植の推進、果皮障害防止技術を普及します。

担当者及び部門名 美島（果樹）

個別－２ 花きの安定生産技術の確立

概要

‘ノーブル’の「葉枯病」対策として「まもるん」の利用方法の改善、トルコギキョウの立枯病防除対策の検討、定期的な土壌診断による施肥改善、ヒートポンプ夜冷処理による夏期の切り花品質向上に取り組むことで、栽培技術の改善方向が明確になりました。

課題を取り上げた理由（背景・目的）

オリジナルユリ品種‘ノーブル’では、「葉枯病」対策として「まもるん」を利用したところ、コスト面で問題がありました。このため、燃料代を削減する利用方法の改善が必要となっています。

オリエンタル系ユリとトルコギキョウでは、標高差を利用したリレー出荷に取り組んでいます。盛夏期には切り花品質の低下が問題となっています。このため、夏秋期を通じて高品質な切り花を継続出荷することが求められています。

また、トルコギキョウでは、立枯病の発生が問題となっており、その対策が求められています。

その他、オリエンタル系ユリではスミ症等の生理障害が発生しており、施肥方法の改善による高品質安定生産技術が求められています。

対象 花き生産者（ＪＡ高知県れいほく花卉部会、とされいほく Confidence Flower）

目標（評価指標）

評価項目	現状 (H29 年度)	目標 (H30 年度)	実績 (H30 年度)
‘ノーブル’ 秀・優品率	63%	70%	46%
トルコギキョウ立枯病防除指針	0	1	1
オリエンタル系ユリ施肥指針	0	1	1
オリエンタル系ユリ（７～１０月）秀・優品率	80%	90%	96%
トルコギキョウ（１０～１１月）秀・優品率	74%	80%	病害発生で不明

活動内容

- 1 ‘ノーブル’の葉枯病対策では「まもるん」の効果・効率的な稼働方法を検討しました。
トルコギキョウの立枯病防除対策では、実態調査と糖蜜や低濃度エタノールを利用した新たな土壌消毒の実証ほを設置しました。定期的な土壌診断を実施して、施肥改善に取り組みました。
- 2 ヒートポンプ夜冷処理等の高温対策技術を検討し、盛夏期の切り花品質の向上に取り組みました。



現地検討会

活動にあたっての連携する団体

ＪＡ高知県土長地区れいほく営農経済センター

結果及び成果

- 1 ‘ノーブル’では、「まもるん」の稼働時間等を変えることで、前年より燃料費を低減することができました。トルコギキョウの立枯病対策では、実態調査によって現状の問題点や改善方向を組織内で情報共有しましたが、新たな土壌消毒方法では、その効果が不十分でした。定期的な土壌診断によって、施肥改善に向けた意識を高めることができました。
- 2 オリエンタル系ユリでは、夜冷処理期間が前年に比べ短かったため、到花日数が短く、切り花品質が悪かったことを組織内で情報共有しました。トルコギキョウでは調査ほど病害が発生し、その効果を確認することができませんでした。また、細霧冷房装置について県内の先進事例を調査することで、新たな高温対策技術を組織内で情報共有しました。

残された課題及び今後の活動

- 1 ‘ノーブル’では、消費地から安定供給が要望されていますが、自ら球根を養成しており、病害も発生し易く増産が難しい状況にあります。そこで、部会内で産地の方向性を明確化します。
- 2 高温対策技術(夏期高温期のオリエンタル系ユリ適品種把握等)を検討し、夏期高温期の切り花品質向上につなげます。

担当者及び部門名 笹岡（花き）

個別－３ 有機栽培トマト農家の経営安定

概要

ミニトマトの収量が5t/10aを達成した農家数は、前年と同じ2戸でしたが、施肥技術等の向上が見られました。また、減収要因を解決する実証ほを設置したことで、ライムギによる緑肥栽培の有効性など新たな知見が得られました。「大豊とまと」の活動を支援し、部会員相互の技術研鑽につなげました。

課題を取り上げた理由（背景・目的）

大豊町の有機栽培トマト農家が中心になって組織された「大豊とまと」は、栽培技術の相互研鑽と有利販売を目的として、現地検討会の開催等、活発な組織活動を行っています。しかし、生産者間の収量格差が大きく、必要とする収益が十分確保できていません。この要因として、土壌分析等の結果を参考に施肥していますが、収量向上に活用できていないすずかび病や葉かび病、連作によるサツマイモネコブセンチュウや土壌病害の発生、高温による花粉能力の低下、裂果等による減収があります。

そこで、施肥改善や減収要因を解決し、収量向上につなげていくこと、活発な組織活動を通じて、部会員の技術が向上するような支援が求められています。

対象 大豊とまと（構成人員10戸（うち有機栽培農家8戸））

目標（評価指標）

評価項目	現状 (H29年度)	目標 (H30年度)	実績 (H30年度)
ミニトマト5t/10a達成農家数	2戸	4戸	2戸

活動内容

- 各生育ステージにおいてポイントとなるかん水や施肥管理等について、作物栄養診断や土壌診断を実施し、個別巡回や現地検討会等を通じて技術の向上を支援しました。
- すずかび病や葉かび病、裂果対策として、「まもるん」を利用した実証ほを設置しました。サツマイモネコブセンチュウ対策として、栽培後半(10月)に低温伸長性が高いライムギを栽培する実証ほを設置しました。土壌病害対策として土壌還元消毒の実証ほを設置し、改善技術の確立を支援しました。
- 生産者間の情報交換や勉強会の開催を支援しました。



「大豊とまと」総会



現地検討会

活動にあたっての連携する団体 JA高知県土長地区れいほく営農経済センター、大豊町

結果及び成果

- 定期的に植物体中の硝酸イオン濃度等を分析し、収穫期後半の追肥が遅れないように指導したことで、施肥管理技術は改善されましたが、10a当たりの収量が5t以上となった農家は、前年と同じ2戸でした。
- 「まもるん」による葉かび病等の病害抑制の効果は判然としませんでした。裂果防止に有効であることが明らかになりました。ライムギによるサツマイモネコブセンチュウの軽減効果は確認できませんでしたが、有機物の施用や作業軽減に有効であることが分かりました。土壌還元消毒では、土壌病害の抑制効果が不十分でした。
- 「大豊とまと」の現地検討会や研修会の開催を支援し、栽培技術について部会員が相互に研鑽することができました。

残された課題及び今後の活動

「まもるん」を利用した葉かび病等の防除対策を引き続き検討し、減収要因を解決します。また「アイコ」ではヘタ落ちや葉かび病の発生が多かったことから、品種を変更する予定で、定期的な土壌診断等を継続し、品種に応じた施肥管理等を検討していく必要があります。

担当者及び部門名 笹岡（野菜）

個別－４ 中山間地域の大規模土地利用型法人の経営改善

概要

嶺北地域を代表する大規模土地利用型法人の更なる経営発展のため、中長期的な経営ビジョンを作成しました。経営者や若手職員への栽培技術の勉強会を開催し、冬春収穫の葉菜類の栽培実証により新たな栽培体系が確立できました。

課題を取り上げた理由（背景・目的）

（株）カワムラファームは水稻とショウガを主体とした大規模土地利用型法人ですが、周年雇用体制に対応する栽培品目や作付体系が確立されていません。そこで、中長期的なビジョンを策定し、収益性・生産性の高い栽培計画の作成や、経営者と若手職員の栽培・経営管理能力の向上について支援しました。

対象 （株）カワムラファーム



勉強会



実証ほ設置

目標（評価指標）

評価項目	現状（Ｈ２９年度）	目標（Ｈ３０年度）	実績（Ｈ３０年度）
ビジョンの策定	０	１	１
勉強会の実施	０回	４回	４回

活動内容

- （株）カワムラファームの経営上の問題点と課題を聞き取り、中長期的な経営ビジョンの策定に向けて協議しました。
- 年４回勉強会を開催しながら、若手職員主体で葉菜類（キャベツ、ハクサイ、レタス、ブロッコリー）の冬春収穫の栽培実証ほを設置し、品目別に経営収支を試算しました。
- 定期的に栽培状況を確認し、栽培技術の向上へ向けて支援しました。

活動にあたっての連携する団体 JA高知県土長地区れいほく営農経済センター、本山町

結果及び成果

- 経営ビジョンの策定で、３年後、５年後、１０年後の目指す経営方針が明確になり、法人内で共有されました。
- 栽培経験の無かった葉菜類の栽培実証ができたことで、若手職員の栽培意欲が高まりました。
- 平成３０年度の栽培実績をもとに、次年度の作付計画（案）を作成することができました。

残された課題及び今後の活動

夏秋に収穫できる新たな栽培品目を検討し、周年安定出荷できる栽培体系を確立していきます。

担当者及び部門名 西窪（経営・担い手）